

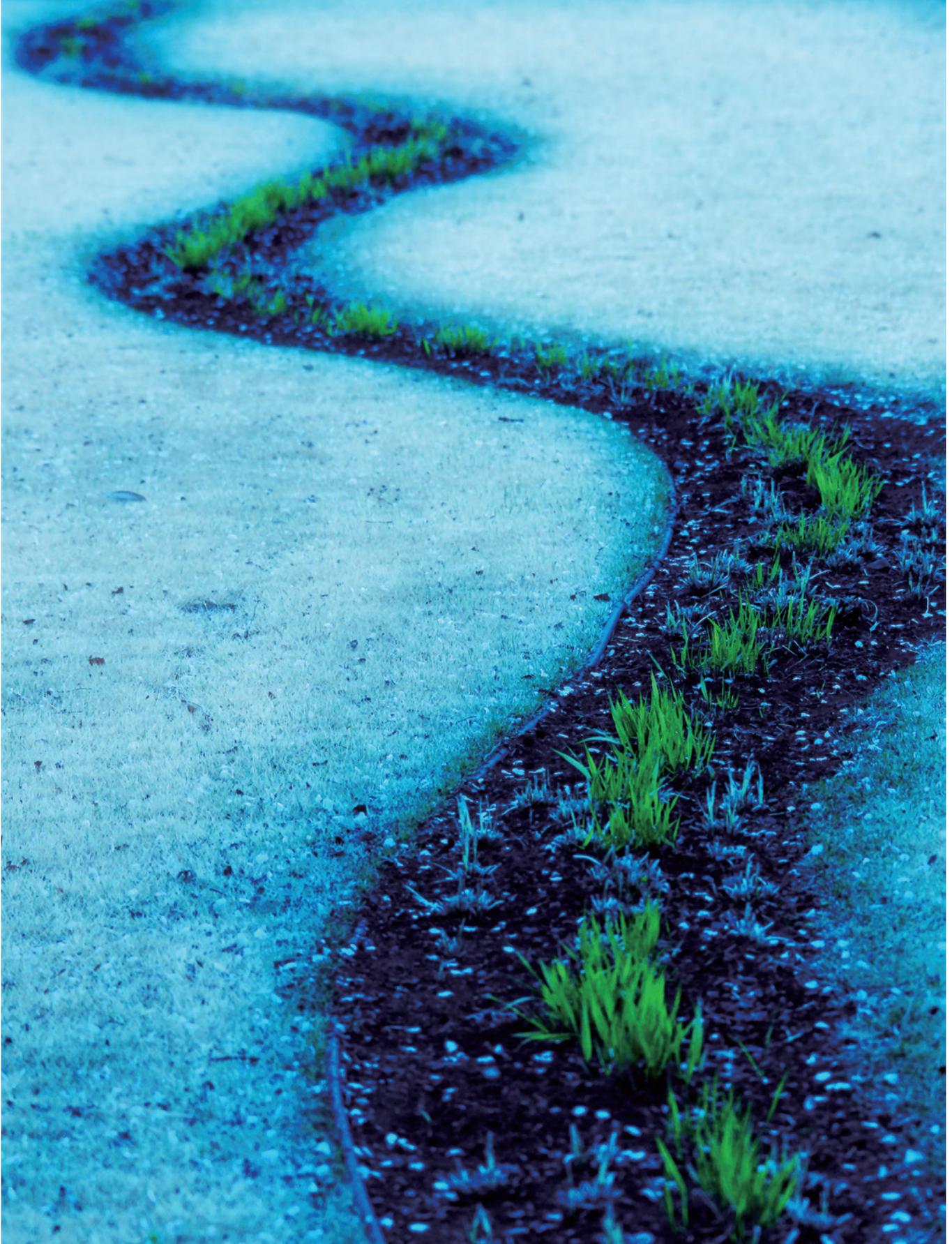


2023.12
Vol.

32

一般社団法人 二科会写真部 広報誌
NIKAKAI ASSOCIATION OF PHOTOGRAPHERS

REAL





新部門で 新たな風 にも期待

第72回二科会写真部展は、3月1日（金）から10日（日）までの期間で作品を受け付けます。昨年は、コロナの制限が解除されての展示となり、連日会場に多くの方が詰めかけたほか、ギャラリートークも復活するなど、日常の光景が戻りつつあります。72回展もたくさんのご応募をいただき、国立新美術館に飾られる感動を味わってください。

今年も単写真部門、組写真部門、アートフォト部門の募集がありますが、それに加えてYoung部門を新設。応募資格は満25歳以下に限られます。二科の応募者が高

齢化しているなか、近年はSNSなどを中心に若い方に写真の楽しみが広がっています。かつて二科会写真部展では学生部門がありました。その廃止から10年が経ちました。第70回展で見ると30歳代までの応募が全体の2パーセントという実態があり、次世代を見据えるための部門新設となったのです。審査の方向性も「完成度よりも原石を見いだしていきたい」（米山事務局長）ということで期待が高まります。

作品募集を前に片岡代表理事は、「80周年に向けて、あらたな一歩を二科会写真部は踏み出しました。ひとつの目玉はYoung部門となりますが、やはり従来の二科の伝統と新しい写真がどう交わるのかが楽しみだと思っています。若い人の写真は二科の写真ではない、ということではなく、両者がコラボしていき、お互いの良いところを吸収できるようになれば、二科の新しい方向性が見えてくるのだと思います。この72回展は時代の転換点になることを願っています」と期待感たっぷり展覧を語りました。

ご注意ください

グループ撮影会における類似作品の応募について

展覧会委員会からグループの撮影会で撮ったものの応募について、以下のような発表がありました。

「同じ支部から内容が類似した作品の応募があります。支部内のグループが勉強会などで同一被写体を撮影し、その作品を参加した複数人が重複して応募するケースです。

類似した作品の複数応募は、作品の新鮮味や魅力が失われ、審査員の印象にも影響します。また、会員・会友の出品作品と公募作品が類似するケースがあり、類似した作品が同時に展示されることにもなります。よって以下の点にご注意ください。

① グループ内で調整し、撮影会などの類似した作品の「同時応募」は避ける。

② 撮影会指導者は、撮影会での作品を他の参加者と同時に出品しない。

③ 類似作品を他の公募展などへ同時に応募しない。

など、作品応募の指導において

も適切な対応をお願いします」

類似作品の定義は非常に難しく、主催者によっても判断が分かれているのが現状です。同時に複数のコンテンツに応募することはもちろん、入選作品をうっかり他のコンテンツに応募することのないようグループ内やご自身での管理も必要です。

ちなみに二科の公募規約では、以下のように定められています。

① 応募作品は、未発表作品に限ります。

② 応募期間の時点で、他の写真コンテストに応募中の作品、今後に応募予定の作品は、応募できません。

③ 他の写真コンテストなどで入賞・入選になった写真や公表の印刷物に掲載、Webサイトに掲載した写真は、既発表作品になり、応募できません。

④ 当会が「既発表作品」あるいは「類似作品」と判断した場合は、入賞・入選を取り消します。

二科写真部展ではSNSで発表した作品についても既発表とされていますので、過去にアップした写真や今後アップ予定の作品は応募しないようご注意ください。

森井禎紹会員が 兵庫県文化賞を受賞

兵庫支部の森井禎紹会員は、長年にわたる写真家としての作家活動や二科写真部理事長などの要職を務めるなど、兵庫県の写真芸術の振興に尽力したことから、令和5年度兵庫県文化賞を受賞し、さる11月10日（金）、兵庫県公館大会議室にて贈呈式が行われました。

森井会員に話を聞くと「写真界では5人目ということですが、写真の地位というのはまだまだ低いと感じています。このような受賞を機に、今後活動する人たちにとって励みになれば幸いです。私も皆さんにご支援いただき、今があると思っておりますので感謝いたしております」と喜びを語ってくださいました。



長野支部が 創立40周年 記念パーティーを開催



長野支部が創立40周年を迎え、11月5日（日）に「長野支部創立40周年記念式・第29回支部公募展表彰式・祝賀会」を茅野市民館にて開催しました。会場には片岡順一代表理事や米山悦朗事務局長のほか、後援各社代表が集まり、公募展の受賞者などを含む約60名で賑々しく40周年を祝いました。

長野支部では夏に40周年を記念した大撮影会を開催したり、公募展の作品集に40周年のあゆみを掲載するなど、節目の活動を大切に行ってきました。記念式では、創立メンバー7名の功績を称えるとともに敬意と感謝の念を表し、今後の支部発展を誓いました。

広島・静岡支部で講座開催 外部指導者を招いて 新技術の習得を目指す

前号でも各支部の活動が活発になってきたことをお伝えしましたが、広島支部や静岡支部では、二科会の講師ではなく外部より写真家を招いての勉強会が行われました。

まずは広島支部ですが、9月30日（土）には広島県立美術館地下1階講堂で、翌10月1日（日）には福山すこやかセンター1階ホールで、OMデジタルソリューションズから田中博さんを招き、フォトセミナーを開催。「トンボの田中」として写真業界でも知られる田中さんのフォトライフとOMシステムによる作品に釘付け。さらには「タッチ&トライコーナー」も人気でした。

さらには10月14日（土）に写真家の岡嶋和幸さんとデジタルカメラマガジン編集長の福島晃さんを招き、撮影からプリントまで作品制作のヒントを語っていただきました。

また静岡支部では、11月11日（土）に秋季写真教室を開催しま

した。講師は数多くのコンテストで入賞を重ねてきた写真家・四方伸季さんで「最良のプリントの作り方」がテーマ。コンテンツに入賞する作品づくりのコツやプリントについて豊富な事例とともにわかりやすく解説いただき、実際に支部員の作品をレタッチしてプリントするなど実践的な内容となりました。

各支部とも二科の写真だけではなく、幅広い知識や技術を習得することでより多様な表現で二科に挑戦することを目指しています。

満足したという厚心に魅せるという考え方が心に響きました」と感想を寄せてくれました。



広島の鳥越支部長も参加してのトーク。新しい撮り方など参考になることばかりでカメラの魅力も伝わってきました。

撮りたいものがあれば 生涯現役で写真を 楽しむことができる



須賀 一 (すが・はじめ)

1929年、東京上野広小路にある老舗料亭「同花」に生まれる。立教大学卒業後、プレザントクラブ西山清氏に師事。71年、初の個展「アメ横の人々」(銀座ニコンサロン)開催以後、上野浅草を題材にして写真展・写真集で発表。二科会写真部名誉会員。

昭和4年生まれ、94歳、現役で写真を撮っています。大腿骨を骨折してリハビリをしていましたが、正直言って気力が弱くなったかなと思つた時期もありました。ただ、ど上野のカレンダーをやつたり、台東区写真連盟の名誉理事長を任されたり、月刊『上野』の表紙や二科に関わっているの、「やんなくちやいけないこと」があつたことで救われました。

この歳になつて思つたのは、「写真をこれだけ残してどうするの」ということでした。よく亡くなつた後に家族がネガを捨てたという話を聞きますが、それはちよつと寂しいことです。幸い、私が撮り

続けてきた台東区の写真は、将来的に区の文化財として活用してもらえることになっていますが、二科の皆さんはどうでしょう。そこで提案したいのは、形に残すことです。もちろん先立つものが必要になりますが、写真集という「形」にしておけば、家族も大切に保存してくれるでしょうし、図書館に収めたりすれば生きた証がずっと残ることになります。

ところで、二科の思い出というところ、昔ニコンサロンが松島眼鏡店の2階にあつたころ、地下の喫茶店に横山宗一郎さんや浜口タカシさん、飯島志津夫さん、高橋扶臣男さんら関東地区の連中が集まつて、写真談義をしていました。二科のこと、写真のこと、さらにはプライベートなことなど、口の悪い男もいきましたが(笑)、いろんな話をして活気があつたことが思い出されますね。

当時からすると、創作の写真なんて考えられませんでした。もちろんフィルムのコピーなどはありましたが、いまはないものを簡単に持つてくることができたり、イメージの世界を表現できるようにな



京成電鉄 博物館動物園駅／昭和62年

上野駅／昭和48年



りました。まあ、時代遅れと言われそうですが、私は目の前に起きた出来事を一枚撮りで記録するストリートなものでこそ、写真の醍醐味だと思います。二科も両極端の表現が会場に並ぶことになりましたが、私は最後まで一切手を加えない一枚写真にこだわっていきたくいですね。

二科も高齢のメンバーが多いのですが、私はローアングルができなくなつたり、手を伸ばして俯瞰のアングルを取るのが辛くなつたりして、撮つた写真を見ると下手になつたのを実感しています。でも、一年に一回、国立新美術館に飾るといふ目標があると、作品づ

くりを頑張るのではないでしょうか。もちろん、その他のコンテストでもいいし、支部展でもいい、発表して見てもらう喜びは何物にも代えがたいものです。

これまでヌードから風景、地元まで全部撮ってきました。あれも撮りたい、これも撮りたいという「写欲」があれば、いつまでも元気で写真を撮り続けたいと思います。何よりも私が実践していますから。

出雲に住んでいるからこそ伝えたい追憶の印象

私は出雲市に住んでいます、そこには「古事記」に記されている神話の舞台が数多くあります。

ふと見ると美しい自然があり、人情味のある人たちがいて、神話や古事記の世界が不思議と一緒にあって日々を送っていることに気づかされます。

写真集は2冊目となるのですが、以前から出雲をテーマにしてみました。約40年間撮り続けてきて、二科会でお世話になった師の川本貢

佐々木聡



1959年、島根県津和野町生まれ。二科会写真部会員、島根県写真作家協会副会長、ペンタックススリコーファミリークラブ。写真集『欧州紀行～心の旅路～』。

功先生や、植田正治先生からは、

写真の心を学ばせていただき、何をどう見たかを表現するものと教えられました。この写真集で、心に感じた世界、目には見えないものを描きたいという思いが巡ったのも、お二人の先生のお言葉を思い出していたことでした。

モノクロ写真にしたのは、時代を超えて伝えたい、また自分が「生きた証」として自分を見つめ直そうと感じたからです。そして形や思いをストレートに伝えるために色の情報を黒と白に集約したいと思ったためです。

出雲には永遠の日本の姿が残っていると感じています。ここ出雲に住む者として気配や追憶の印象を一冊にまとめました。語り尽くせてはいませんが、私なりの世界を感じていただければと思います。



佐々木聡写真集
『出雲の国～追憶～』
定価 5,500円(税込)
問合せ 0859・22・2155
(日本写真出版)

テーマが見つかったら写真表現がより深くなる

私は写真を続ける上においてテーマを持つことが重要だと思っています。2022年には東京・渋谷

をとらえた写真集『シブヤshi buya』を刊行しましたが、同時に撮っているものもたくさんあります。そのうちのひとつが今回の写真集『東京ジャンクション』です。

撮るようになったきっかけは、テレビ番組で外国からの旅行者がスマホ画面を見せたシーンで「箱崎ジャンクション」が写っていたことでした。複雑に分岐しているジャンクションの形に驚いていましたが、私もこの不思議な構造物に興味を持ちました。

東京都内のジャンクションを昼間にすべて撮ったのですが納得がいかず、夕方から夜にかけて撮り直しました。キリッとした写真にしたかったので絞りはF16、フィルム感覚で撮るためISO感度は1000に固定し、ピントには細心の注意を払いました。

高橋康資



1985年、写真活動を始める。報道写真家・浜口タカシ氏に師事。写真集は、2019年『江ノ電のいる風景』、2022年、写真集『シブヤshi buya』(日本写真企画)を刊行。日本写真家協会、二科会写真部会員。

次のテーマも撮り出しています。

テーマをもって撮った写真の中からも二科展へは十分に応募できます。テーマが見つかったら、マンネリしないようにいろいろな撮り方を試みますし、被写体のこともよく調べて深く理解するようになり、作品づくりでプラスの効果をもたらします。身近にあるものでよいでしょう、テーマを見つけて追いかけてほしいですね。



高橋康資写真集
『東京ジャンクション』
定価 2,750円(税込)
問合せ 03・3551・2643(日本写真企画)





卯都木 勲
(埼玉支部)

会場に自分の作品が飾られ感動した

二科展には今回初めて応募しました。埼玉の支部公募展では4年連続で入選し、思い切って本展に挑戦してみたというアドバイスをいただいたのがきっかけです。いずれ応募したいという気持ちはありましたが、まだ実力が伴わないかなと思っていたのが本当のところでした。

5点応募したのですが、内定の連絡をいただいたときはびっくりして信じられませんでした。家内も驚いていましたね。会場には妹や友人、知人も来てくれて嬉しかったですし、会場皆さんの素晴らしい作品の中に自分の一枚があったことに感動しました。

支部では諸先生から被写体を逆光から探し、光と影で演出する、立ち位置で大きく写真が変わる、背景はすっきりさわやかに、というご指導をいただいております。私も作品づくりの際にはいつも気をつけているつもりです。次の応募へ向けて、新たな気持ちでチャレンジしたいと思っています。

岩織 大輔
(北海道支部)



入選は次へのエネルギーになる

私は北海道の動物などを道東まで車で5~6時間かけて撮影に行くことが多く、最初は我流でやっていましたが、二科の支部に入って先輩方から丁寧に教えていただいたお陰で考え方や撮り方も明確になってきたように思います。実力のある方ばかりなのでいろいろと新鮮な気持ちで学ばせてもらっていますね。やはり一人で写真を撮るといのは、自分の力がどうなのかを見極めることが難しく、限界があるなど感じていました。

二科展には2年連続で入選することができずに「自分には難しい」「まだまだ実力の差が大きいな」と感じていました。そして3度目の挑戦。自信はなかったのですが、入選の知らせをいただけて嬉しかったですね。仕事の関係もあって東京での展示を見ることはできませんでしたが、美術館に飾ってもらえたと思うと喜びですし、来年もまた入選できるよう撮影にも力が入ります。



第71回展で初入選を果たした全国の写真仲間に話を聞きました。

初応募で入選の方もいれば、何年もかかった人もいて、それぞれにドラマがあります。



竹内喜代美
(三重支部)

通知を何度も見返したほど嬉しかった

写真を撮始めたのは5年ほど前でしたが、家族旅行へ行っても写真が下手で娘に「ちゃんと写真を撮習ったら」と言われて地元の団体にお世話になることに。最初は皆さんの写真を見て、私には作品づくりなんてとんでもない、と思うほどレベルが高くて驚きました。

それから蜂須賀秀紀さんに写真を撮るようになりました。撮影で行った豊橋動植物園にはその後、何度も通って撮るようになりました。入選した作品は、シマウマが開放されているめったにないシーンに出くわしたときのものです。一斉に食事をし始めた場面で、「この写真は二科に出したほうがいい」というアドバイスをもらった一枚です。

応募は2回目でしたが、私は二科の写真が好きで、いつか皆さんの写真と一緒に国立新美術館に飾られたらいいなと思っていたので通知をいただいたときは、名前を何度も見て間違いのない、と思ったほどでした(笑)。

嶋田 亨
(長野支部)



二科展への入選が目標だった

長野支部に入って5年経ちますが、3回目の応募で初めて入選することができました。入選した写真は被写体となった選手にもお送りしたところ大変喜んでいただきました。撮ったほうも、撮られたほうも喜べるというのは写真を撮っていて本当に良かったと感じます。

元々光学機器が好きで、カメラも好きでした。作品づくりは企業で言う役職定年になる55歳くらいから始め、スナップや動くものを撮ることが多かったですね。

中学の恩師が日展の油絵に入選したことがあったのですが、その影響もあって美術団体への応募が頭になり、写真部のある二科への応募を考えるようになったんです。最初は自分の作風とは違っていたかなと思っていましたが、入選という連絡を受けたときは嬉しかったですね。国立新美術館で自分の作品を目にしたときは感無量でしたし、「来年もまた頑張ろう」という気持ちになりました。



二科展へ応募するきっかけは、アートフォト部門があったからです。私は頭に描いたイメージをパソコンで作りだしていくのですが、ああやってみたい、こうしたほうがいいかなとやっていると時間がかかるときもあるし、すぐに得心いくときもあります。入賞した作品は、時間的にはそれほど掛からなかったのですが、細部を詰めていくと、もうちょっとこうしようかなと思うところもあり、完成したのは1か月くらいしてからでした。手応えはあったので選ばれようと落選しようと納得の一枚でした。

評価されたときは嬉しかったですし、広い会場に自分の作品が並んでいるのを見て感動しました。そして表彰式に出られたのも感激で、入賞したことで前向きにもなれました。



作品を作るのは根気があるし、体力的にもきつと感じますが、二科への応募という目標ができたので、辛抱強く、時間をかけながら続けていきたいというパワーになりましたね。



瓜生 倫子
(岡山支部)

二科展への応募が作品づくりの目標



三谷 浩
(京都支部)

入選によって今後への希望が持てた

5回目のチャレンジで初入選することができました。二科展は30歳頃に観て、凄いなと感じましたが、自分にはこういう写真が撮れるのかなと思っていました。いざ挑戦するとなったときは、審査の先生が何十人もいる上に、全国から寄せられる1万点前後の作品の中から印象に残る写真でないといけないと思い、対策を考えていました。

今回の作品は郵便局に出す2時間ほど前に組みあわせた写真でした。発車の合図を送る運転士と乗り込む乗客の姿を、人見知りで臆病な幼少期を過ごした自身の心情として表現したものです。二科向きではないと思いましたが、なんとか爪痕だけでも残せたらと考えていたんです。入選するならばこの作品だろうと信じてはいたのですが、これをきっかけに花鳥風月だけでなく、自分の好きな路線でも評価してもらえることがわかり、今後の作品づくりの希望が持てました。



初入選「喜びのこえ」

写真部展には5回ほど応募して初めての入選だったんですが、私は広告制作の仕事をしていてデザイン部にも応募しています。写真部では初めてでしたが、デザイン部では奨励賞をいただき会友になることができました。写真部の方と知り合ったことがきっかけで応募するようになったのですが、同時に飾ってもらえたのは喜びですね。

鹿児島支部でラグビーを撮って9回くらい入選していた方がいたのですが、その人に誘ってもらい撮影方法を教えていただきました。実は亡くなられてしまったんですが、今回の入選はその恩人に捧げることができたのかなとも思っています。

鹿児島支部では月に1回の例会があつて、写真を持っていくと実に的確に指導していただけます。



トリミングなどは自分でも気づかない視点だったりするので勉強になります。もっと腕を磨いて2度目の入選を目指したいです。



米森 賢志
(鹿児島支部)

デザイン部と同時に展示されて感動



森山 節子
(徳島支部)

来年もがんばろうという目標ができた

写真は長くやっているんですが、二科展への応募はまだまだ、と思っていました。あるとき、先生から思い切ってチャレンジしてみようと言われ、単写真部門へ5枚応募したんです。

入選した作品ですが、淡路島での神事です。立春の光がやわらかくてベストタイミングだと指導され、逆光側から連写で一気に撮り、一番よいと思うものを選ぶことができました。ただ、私自身はとても入選するだなんて思っていないで、自信もなかったのですが……。入選内定のお知らせをいただいたときは本当にうれしかったですね。

二科展は東京の美術館に飾ってもらえるということで私にとっては夢でした。9月の展示には東京にいる友だちも国立新美術館に来てくれて、私の写真に対して「いい瞬間を撮っているね」と一緒になって喜んでくれました。こういうことがあるので、来年も頑張つて、またみんなと会えたらいいなと、目標ができました。





第71回
二科会写真部展
大盛況の内に終了

2023年9月6日(水)から18日(月)まで東京・国立新美術館にて開催された二科展には6万4557名の来場者がありました。また、9月8日(金)には、東京プリンスホテルにて写真部の授賞式を開催し、今年は全国から467名が参加。久々に多くの仲間と顔を合わせることができ、あちこちでたくさんの笑顔が見られました。

また、期間中は、9月9日(土)に森住博理事、16日(土)には照井四郎理事によるギャラリートークを行い、作品の前には人だかりとなり両氏のコメントを聞き洩らさないようメモをする姿も見られました。

兵庫支部

兵庫支部は、10月3日(火)に「会員・会友推挙お祝い会」を開催しました。これは以前から実施しており、その年の会員推挙者を支部員でお祝いするもので、今年も会



員に河本繪子さん、春名恵美さんが推挙されました。また会友も同時間にお祝いされ、推挙された鈴木三榮子さん、谷村周慈さん、津田恵さんと共に喜びを分かち合いました。

この会は、なんと30年にわたり続けられており、次世代の会員・会友の活躍を願う会となつています。兵庫支部の森井禎紹会員は「こうして仲間が増えるのは素晴らしいことです。そして、ここで

お祝いされるのは、兵庫支部員にとつてのひとつの目標となつていきます。毎年お祝いできるような皆さんと楽しんでいきたいですね」と語りました。

岐阜支部

立川洋会員が表彰

岐阜支部の立川洋会員が、第72回岐阜市教育委員会表彰を受けました。立川会員が、これまでに岐阜市教育文化振興事業団、岐阜市民文化祭、岐阜市美術展覧会などでの出品活動、審査員や委員会・写真部で活動した50年近くの文化事業への功績が評価されたことでの表彰となりました。

新潟支部

新春文化講演会開催

新潟支部では新春文化講演会を1月20日(土)に開催しますが、今年の講師は佐渡島生まれで、元文化庁長官、日展の理事長などを務める宮田亮平さんです。写真以外の分野の話聞ける貴重な機会と

なります。なお定員は180名です。
日時：1月20日(土) 11時～12時30分(受付は10時30分から)
会場：アートホテル新潟駅前4F 越後西(新潟市中央区笹口1丁目1番地)
演題「私のチャレンジ人生」
問合せ：090・3145・6648(金子)

支部展情報

第73回中部二科展

愛知県・岐阜県・三重県の会員・会友・同人及び一般応募者の作品約120点を展示します。
会期：3月19日(火)～24日(日)
会場：愛知県美術館ギャラリー
時間：10時～18時(最終日は16時)

富山支部公募展

会期：1月6日(土)～8日(祝)
会場：富山県民文化会館
時間：9時～17時(最終日16時)
【第二次公開審査】
稲澤一彦、長田達明、山口裕美会員による第一次審査を通過した作品を展示し、6日(土)の9時30分よりフォトコン誌編集長による第二次審査を一般に公開して行います。普段は見ることができない審査の様子が見られるとともに富山二科賞など入賞作品が決定する瞬間に立ち会うことができます。



昨年の公開審査の様子。

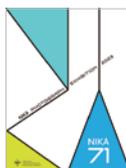
新潟支部は、写真雑誌の『フォトコン』とコラボし、支部員の作品を添削、作品づくりを向上させる連載「フォトコン添削道場!」を1月号よりスタートさせています。講師は広島支部長の鳥越修氏が務め、オンラインで編集部と講師を結び、一人3点の作品を添削するというもの。その様子をフォトコン読者に届けるためになんと8ページで展開。二科の応募にも繋がるヒントもあるのでぜひ1年間、新潟支部と『フォトコン』を注目してください。

二科のことがわかる一冊 『一般社団法人 二科会写真部70年史』

写真部創立70年を記念し、過去の二科賞をはじめ、多くの座談会や、全国の支部から寄せられた写真と文章で綴る保存版。二科の歴史から将来までを楽しめます。定価8,000円(税・送料込み)で購入は事務局まで。



『第71回二科会写真部展作品集』



第71回展の全入賞作品と受賞者の言葉を収録した作品集です。名誉会員、会員、会友の作品も収録されているほか、第1回からの入賞者名簿も記録されている貴重な一冊。見ているだけで学べる作品集です。定価15,000円(税・送料込み)で購入は事務局まで。



新潟支部が
フォトコン誌とコラボ
添削教室を1年間連載

『フォトコン』誌は毎月20日発売ですが、買い忘れのないよう年間購読もお勧めです。

一般社団法人 二科会写真部 広報誌『REAL』Vol.32



発行日 2023年12月31日
編集 二科会写真部会報編集室
発行所 〒106-0031 東京都港区西麻布1-4-20
ワルトハイム西麻布601
TEL. 03-3470-8033 FAX. 03-3470-8034



表紙 「道」角尾抽臣子

第107回 二科美術展覧会巡回展

- 広島展 2024年1月23日～28日 広島県立美術館県民ギャラリー
- 鹿児島展 2024年3月3日～10日 鹿児島県歴史・美術センター黎明館
- 福岡展 2024年3月19日～24日 福岡市美術館

- 小川正勝会友(愛知支部) 2023年8月23日 逝去
- 福岡成之会員(石川支部) 2023年11月7日 逝去
- 会友の逝去者 渋谷俊隆会友(香川支部) 2023年11月27日 逝去